

# 弥生時代の墓地

## - 西京極遺跡 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

今回紹介するお墓は、弥生時代の方形周溝墓と呼ばれるものです。平成18年4月から6月まで行なわれた、平安京右京五条三坊十四町跡の調査で、平安時代の遺構の下から、大小合わせて6基見つかりました(図1)。

方形周溝墓とは、弥生時代前期(紀元前3世紀)以降、古墳時代前期(4世紀)に至るまで各地で作られた当時を代表するお墓で、これまでで数千基以上も見つかっています。溝(周溝)を掘った土で墳丘を作り、墳丘上に埋葬するための穴を掘ります。墳丘を巡る溝(周溝)が方形のため、このように呼ばれています。

見つかった方形周溝墓は、弥生時代中期前半(紀元前2世紀)から後期後半(3世紀)にかけて築かれています。同じ場所に、これほど長く方形周溝墓が築かれてい



写真1 周溝から出土した土器

写真2 巨大な周溝を持つ2号墓

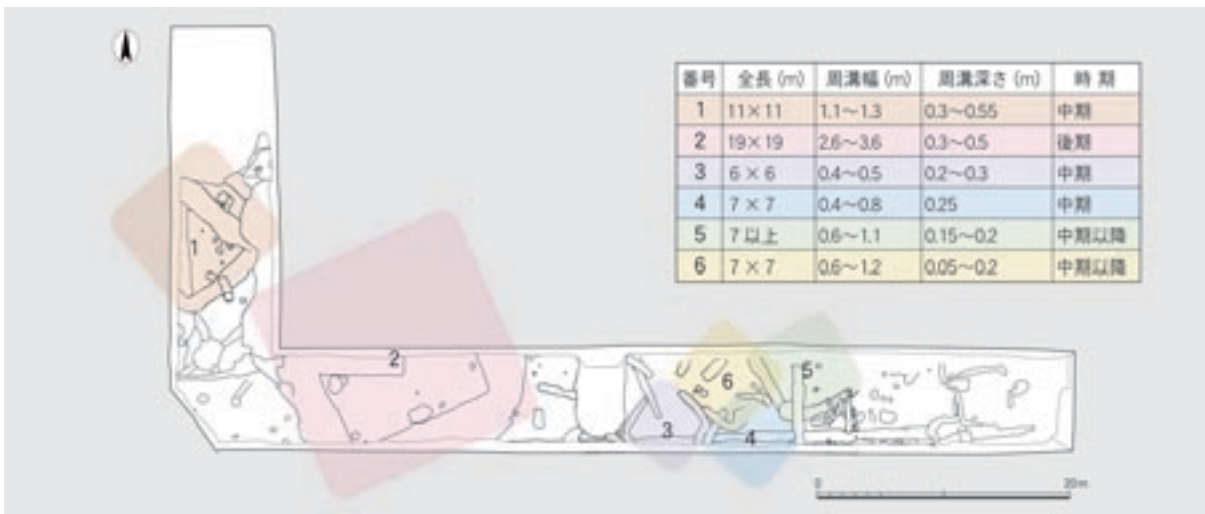


図1 遺構図と方形周溝墓の規模

ることは少なく、注目できます。

弥生時代の大きな集落では、居住する区域と、田んぼや畑からなる耕作地、方形周溝墓などが集まる墓地は、溝や自然地形などによって区画されている遺跡が多いことがわかってきています。今回の調査地を含め、近辺には竪穴住居は見つかっていないことから、墓地として認識されていたと考えられます。

6基の方形周溝墓は、いずれも平安京造営時に整地が行なわれ、墳丘は削られて残っていなかったもので、どのように埋葬されていたかはわかりません。ですから、大きさと周溝から出土した土器に注目してみたいと思います。

周溝の底から出土する土器は、墳丘に供えられていた土器が転落したものと考えられるので、方形周溝墓が築かれた時期を表しているといえます（写真1）。周溝から土器が出土したのは、1～4号墓で、5・6号墓からは土器は見つかりませんでした。大きさと重複関係から時代を推定しました（図1）。まず、中期の3・4号墓は周溝が重なっていること、傾きも大きさもほぼ同じであることから、お互いを意識して作られていると考えられます。中期以降に作られたと考えられる5・6号墓も同じことがいえます。その中で、後期の2号墓（写真2）は周溝の幅が2.5m以上で、一辺が19mもあり、京都市内では最大級の規模です。では、この大きさの違いは何を意味するものなのでしょうか？

近畿地方では一般的に前期から

中期にかけての方形周溝墓は、密集して築かれていることが多く、数もたくさんあります。大きさにもあまり違いはありません。棺の数も複数あることから、家族のお墓ではないかといわれています。3・4号墓は、この時期のもです。しかし、後期に入ると方形周溝墓の数は激減し、その一方で単独で築かれた大型のものが出現してきます。墳丘の規模によって、違いを表す意志が感じられます。つまり、身分の違いを視覚的に表しているといえます。2号墓は単独で築かれており、規模も大きいことから、集落の上位の人が葬られていると考えられるのです。このことは、方形周溝墓が次の時代の古墳成立について重要な意味を持っているといえます。

では、今回見つかった方形周溝墓に葬られたのは、どこに住んで

いた人々でしょうか？

調査地の周辺では、弥生時代の遺跡とされる山ノ内遺跡や西院遺跡、西京極遺跡などが広がっていますが、山ノ内遺跡や西院遺跡からは弥生時代の竪穴住居は見つかっていません。一方、調査地の南西に広がる西京極遺跡からは、中期以降、多数の竪穴住居や溝に加えて、豊富な遺物も見つかっており、広さも東西700m・南北700mに及ぶ大きさで、地域の中心的な集落であると考えられています。これらのことから、西京極遺跡に住んでいた人々の一部が葬られたと考えられます。

近年、西京極遺跡周辺は、発掘調査の件数が増加しています。これからの調査で、平安京以前の人々の生活をさらに具体的に明らかにしていきたいと思っています。

（西森 正晃）



写真3 出土した弥生土器